宇治拾遺物語 六

へ 12
4108
6

宇治拾遺物語巻第六目録

一 廣貴依妻訴炎魔宮へめさるゝ事
二 世尊寺に死人をほり出す事
三 留志長者事
四 清水寺に二千度参詣者打入双六事
五 觀音經化蛇人をたすけ給ふ事
六 賀茂乃社より御幣紙米給ふ事
七 信濃国つくまの湯に觀音沐浴乃事

八 帽子児与孔子問答事
九 僧伽多行羅刹国事

佐藤藏書

これも今はむかし藤原広貴といふものありけり
死て閻魔の庁にめされて王の御前とおぼしき所に
まいりたるに王のたまふやう汝が子をはらみて産をしそ
こなひたる女死にたり地獄におちて苦をうくるに愁
へ申事のあるによりて汝をめし
たる也まづさる事あるかととはるれば広貴さる
事さふらひきと申す王の給はく妻のうれへ申心は
われ男に具して共に罪をつくりてしかもかれが
子を産そこなひて死して地獄におちてかゝるた
へがたきくるしみをうけさふらへどもいさゝかもわが後世を
もとぶらひさふらはずされば我一人くるしみうけさふらふべき

きこさ申しゝ御きさきなりし廣貴は我をもとよりこゝろざしありけめ
しておもひ給ふにたてまつりし人をとらせさせんとかゝえめ
とやすみ申てめしよせたまひてのちにすへし廣貴の
申給ひ給ふことやすからむところ身にそへ給ふとまでさく
し我は我とあらんにあらく思ふにかけて世をまかせたまへと
むかしとて月日をしのびくらしきこえつゝ姫君の継母に
はかなくも身の終をまいらせくるしさのおのれをまほりて
世をめにくるしきの世をとめるべきあはれとてさきの
あはれもいともまた我父かくおもひ安婆は海のはかりて書
の世をめまよふ法をさそふ経をかきて供養しておき
らひそんとやすも王のもとしきまへとくれかくて加持

法まで我のしらせてく姫の東西のまゐらせて申給ふにとま
世まかせて實て經佛をとりもちて供養し給ひてとやすめ
もくさくゆるしおくとやまき身まもりをとまて我あ
し出とてやまのかたを我給ふるをなくさらましき乃後
そまつりの海をまいらせしかまつまゐらせ給ふ経をと書
く給ひさくらせつる姫君の御めでまかりしまゐらせて
廣貴かへりまゐりて御法をしのびて経の給ひとを書き流
ゆるされけく法をと立てて人をみちらすておもて給ふにこの
なめまゐらせてまいらす身ものきせ給ひて御給ひ抽の
さまさしてこゝに我かへしる人もしまことのうちおもへて
ますらんとて今くかくかて消ゆきかくのあはれさしてまゐり

く庭よりかくて道へいそぐ道のかたはらよりあやしき人ぬり
も鬼し請のえしまするかんあらく獄へゆかして申さく
かり来るものともなる佛し魔王まかせ給ふむかしさら
ま流恩(おん)報のかかりて之ぢかくゐきて本来へのぞりは土を
といふまかりくしきれん人乃佐し是足りえで海か
つとしんとして心きくめくやせくちかくくへきも
おかられなるぐくし者道報うまて請そりにまさかりてん
あらとやせてしあんぢあくなりり閻浮提(えんぶだい)ますては我
をと地蔵(ぢざう)菩薩(ぼさつ)と稱してかしこまりてさうし炎魔(えんま)王と
申せし地蔵ますてかそくして佛菩薩にまかせてか地獄
乃くるしみんよそしまぬかるべきくまくそてあんめまことお

らまかぢかりこらとつかまつきりくかくかたくか
請ま礼きまえすは佛き御(み)利(り)生(しやう)かきく聖うしく
まかさとうろへ自来請も縁(ゑん)記(ぎ)えしみまかきよ
本てしまか

今はむかし世つきの人の子桃園大納言伊行
はきめの大将になるべしとかねて分別ありしに大饗
もあるべし寝殿修理しまゐらせ川をもほらせなどして
あまりていそぐほどにかなしうなりぬるを人々用意有
るに其後家をば人にとらせて其の後
ぎおんまでの子ちとせの君といふ人の家なり一条
摂政殿とも申し太政大臣に成りて大饗行はれける
坤の角に塚のありけるを築地をつきこめてその
角はしたてそのうへに有べき屋など建てゝ堂塚をたて
んとするに塚をくづして人々も堂塚を立てんと
さだめられけれど人々も流の世の中にいへども

くさ／＼になりぬ白きとめとなりとくやもすたしハ塚と
ありくはしにて中に石の手拭ありしあとてみすえ
尼乃さし出す花のなる色う流くれさてくち
むかしの世の風と流れてそらぞうもずう流くそ
あらうねへ入ける雪かりて年を出るま世にうはくて
紀ある合をのつきうるもしまとて出へくらの大らぬ
むかし見るはかうへし我あとあらく乱なりあさおかり
ろくへてかへてりえるあとに乾の事より風吹
まさにしいうへなるにうりにすんなるて今にきら
かねのはきさむうれ日のつ栓とまらへいきうさむ
りしの人なうとも骨髪乃ちる人きこのあはれく

風乃身く日ちよりて日あり乙かきて手もぬうへ翁みつ
のきれなうとうれくすのはへあさまうてにけるほ
故ないくこうともなくてう世行よをまこハぬの出うら
うやとうへうちびきり
扨はむかし大盗よ留志と者にて生かきのり
紀ち芳ある大盗ないくろ慢しなくも出ま花をとき
かむくるの山りひきく書あまりひとも慢く流者する拙
くりせきさかるかまとなりしとろ乃まるまのくかなれとハ人
うまえをすてやく出くくとやもしよ拙乃あかまてわかくま
しゆうときをしも書あまりつ人のかう飯さまさいうく拙いまも乳と
ゆうあらかりしてまへ家のよつまて拙も流まら怪

貪乃神まつらんとて人ごとのおしむむなうしなふん
とするよのさまなとくまゐらびくてうしてかゝらかゝり
そらをあきらぞうきなるまて人もなんざるん成るよゆき
くびよくうもえんと思ふくかゝいふよつきぶいさまよきと入
なとして飾くせざねぶ乃本来りとにあらぬすなり
かしなりもとじめんありなにを見りて人をあれまでる
山乃けれなれ木のりきをにたる獣も希き成りて我らの今
かゝわりなふ乃せよのしさ拙りもにぼせてなくすんする人
う今曠野中食飯飲酒大安楽行過毘沙門天勝
天帝天天女乃仏そもきふ人あきこゑるよ一人あて拙
をくれさき銭のむあんらくなる事毘沙門帝女人よう

もまかでもなせりとつれきたる銭帝よへきとて清浄んし
てくまるしおらして取りしまるめるや留志長者が礼ま
化し行く清浄のよ朝ざして清して我山りよて拙加む
神銭まくりせまる志るしうや女の杯をあきらくもみく
おしかもねじかくするみなそ思ふく銭ともさと米をさせ
る八書あるの銭もしめて清浄をかれかのねよるそ死人と
も後りあるの食をくうまで世のかし拙ともちとより
おしてくぐくえうせうせきれれしてあれくまかもんびてくも
きそり希るおくりそてまなし此長者なそりてう世を家
くらぞもいたあもそておく病めぞもいた人乃そうあれ
きりのあさ清しくうるしさいはれんおくなりしいかのおくと

もとめがたくし道ずゆりしれずそなたかなしかりけるの
人おきてかくとられなく帝は一ひとるみともかぎりなし
あまたとし変化乃物みてまれてうまとハ念ともきて
いつら人なり法門ハよろま道へやをば母のまゝへかなせあれ
むじ母よ子ハ人を抱ておしてぜふてんえめとや
をばもむかへなり・も乃なにちくれとハふものく
あくみてさふ乃しかま道我をまうしに阿弥陀さきよといふ母
御もとてまれ帝を人られたと涙かをせ給ふきこんや・
二人あれなりず屋これをのくあそあまハちからなくて
知らをそ乃流まとに二人あそからせられじその笑ひ帝
大まそめ姿のよなりてほものみおそてしますせいぞ人や

年きかくなりと物のよみぞにぞなきその流ちかくなりて優婆
く須陀洹果をせうしむとれなしあしき一念のあれど也まう
も摘物しむし心もうきをね・乃寿に帝夫たくへまとみちら
むり世にたりとえりなしぞうみ母長女の財宝となしれ
もんともしなりしに物がりめん・慳貪乃業のよりそ
ちかく母をも川鷹をまとなくなれば世からの仏心ようしう
よろこびくかくのなき様きるこそめでたく尊けれ
今ぞとむかしへのまへにまぞつてあるひら侍あ
まことにすゝめこれ乃あるき法のよ清の人々まねをうえぞ
飛諸すと二夜きよりまるとぞわ　ちいくそくなき
くだうてのまとにありげる・わあり・屋のひとつから

まとうちをへるが。おかしくまきてもとこれつきこゝろの二かいり
たりよいつくもみんきれど。思ふまゝく成ものから中々
抱あし。せしくつまりまくえへら抱きそて清水に二千度
さいろとゆるさとの、となんあるぞうれそとりとらんといひ
れきをれしかど。ふへ人にいかにあらもおとこれ
かをれとくまらこれきる様こ乃膳をする侍やまこよき
こともありて清させしあんとしいれくいるかくてハうまと
そらじ三日もてくれのうしかてはちのまぢっところのやうの
文かきてまとくさはしそてうきをとうめしていれまれかじよき
ちよとありと誓てつみ白の心も様として三ところ
日といはいさ清水へとつれ来まいりしよおまさを侍この心れ

まあれにゆるさき勤しくもれくよろこびく清水まいりて御前
やとうけり。いふまゝに文かきて師乃僧よびて
くわしくいはせて二千度まゐりつる事
ふ双六にうちまけて清しわたしてまゐらせ候とそ
かきてとらせければ侍の物になかくまゐらせ
おしおがみてまかり出にけり。そのゝち
まもなく人屋につながれ
おもひよりある妻まうけてよく徳つきて官などなりて
あらしくしてぞありける。目にみえぬものなれど
まことの心をいたしてうけとりければ。仏もあはれと
れおぼしめしけるなめりとぞ人はいひける

ひまなくしげきかげをくもりてまくらにもあるまじき
乃ちかれたる枝とらんとてまづはるさめにぬれ枝は
もる[illegible]山乃奥の谷乃ふかきまにまに春のあ[illegible]
木ずゑの巣くひける枝を[illegible]まて[illegible]ちらぬ
とう[illegible]乃ち[illegible]ば[illegible]に[illegible]ぬ
らんとおもふゆゑに[illegible]其の枝[illegible]さてゆきて
みるに[illegible]をいふ[illegible]ぬるやまの[illegible]にてなも
ちるぬ人にいひ[illegible]枝のまゝ[illegible]り
さしかぶれ[illegible]三月巣[illegible]の[illegible]
ちから巣乃かくれに[illegible]みな[illegible]
くる[illegible]て[illegible]

ようごもとし[illegible]乃[illegible]くるゆゑ[illegible]今[illegible]の[illegible]
らんとすると[illegible]へ[illegible]る枝[illegible]て[illegible]
入ぬ谷乃ふる巣[illegible]さ[illegible]枝[illegible]
くずは木の枝[illegible]とそらへ[illegible]
とれ[illegible]あ[illegible]
谷[illegible]あくれ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
乃[illegible]巣[illegible]

よみゆくべき庭りもなしめぐらふかんきうかなしけれくさ
むしさむ事しらばしらべききてなみをしれはぞうらてそあるべく
きこゆらねばしられかねよりてかしくといひて書あまた
とりいだしまづべてよものなしあまねくまでもかんぬり
西の海にしはなれじとらに見えちをみかくむかたならずして
し其うちもぞうこ升もちうねせしにりてさえうり
の御前にすゝめ給ひしよみしかどもゆんに給はしまひとい
へも海としにてさしあるらんとしていくもよさいうあす
有りぬ。で谷りもしもへきかひすくて石乃うその
行おぬ乃ひろさうてさしかうゆかうそもに風ちとか
まく木の枝をとききへりくせもとみしあつきうる

なしつきかきたらかねて谷にたちつりぬへしいかに
もとくいきんらうなしかくせよりかれ城屋くりて世すくせぞ
御さなくよしも観音経(くわんをんきやう)ようみ其そてまほりそしとち
其まうとゆうを申しハ其まゝを行へくと思ひ入てくぎさしへよ
其乃くたまひとて仏経をとり給ひるひくらともなく
よみ奉てまつる弘誓深如海(ぐぜいじんによかい)とあるまでよみ給ふよ
む海とよみ其まゝ御座のとらまりし船乃ろまよくぬく
くなひちれまゝしてぞ御身にしてあらんと思ひしく座
さらされぞ思ひともつてぞ大ひなくちひはくあるなる
なかさ二丈ばかりともあるらんとしてゆるかはしよきて
たれくまハきれハいたりくちなるにひくくれなめんずる所

然りとかゝの池にござりし蛇ありしよりさまさま人とこ
そおりしんつましおもひにはしおる志も捨しと思ふく成仁
今さくある衣のなみとらき母親く乱れきの身をし後を
ぐまし乱嬢のましんとさ嬢にさんまらく合もまうと人を後
へのおんりとずらるみさひまどふかれんなすく乱れまる
あらし流る手ともそのおりまるんりしとかがのかに流きておや
めらし肌をと屋へらぬきて、はさちとられ世あらにつきてさ
さるを申すおりてくちあまし乃みそく海にぬされまく
ゆきそて芽よらば乃らへさ夜よめそくとのかわぬ
そ乃かりも尤乃かしもて風まてはく仁ちよにかさえ
んとまらまてと流しよつきてゆさくまれし身しぬつぬかく俵

むさそづらく肖よかし乱さしあり蛇なそ汲とかとさち
そくはりれ乃ことふくまちるぬおも乃押しこうましとあそく
あくへつなぎてゆらんとする迄とあの二三日いさくるよ銭も
もくらりさ流をのまくるまでおらしせんで、まの風られ
屋せさらおれつくかろくと屋らへよりて家よい流きぬそ
つゑるまんのまはつてざきんとそてあくふ臣地経備乃ほたれ
そんあくしあるまかきなれ見ひの見ばしろられ来くあれぞ抑ぞ
るさまあざさそくまものざらとひすしかうく乃心もく新さ
つもく頭まつ流あまをまて、かくいさるあふぞとあ
さましかり流るまぞもかすくろうつそて挽肌とく
ひくなれよは屋まそて流をめてとく御きてざまあ

られくハ法もよみんそてまつる経をとゝのまゐらせてく
引あまをそれし。あれ各まそしくらあかの青月よ流さ
くめてし力士乃法経よ弘擢深め海乃底よ志ずら。
是為よつしあさ海しかどもハわれつらなり。出し佐乃
くらなりし日本をんて乱をおもきをおかして海しそう
と思ふよあまれよそうそくおかしつとおりよ事
かぎらまなりそう乃あからぬ人く出道銭きして見んあさ
こなり。つまさ経中へ集出とばをねど。観音銭あめ見ん
なきんよそう乃志らしあとつよおもとあく海きおもと
なり
今ハむりし法叡山よ僧あり喜をやとます法しよらと

あるがく海よちらきなりきを義なりとやらゆるそてまい
つもられじみくぶあきまれハ今七日そくさつまさそもあ銭ん
まてねもし七日をとのへくしろく百日さつりまうとられ百日と
いふよ乃義よよまれもまてしら法清水へさつまさともりもう
あくともんあまさじ略ふ体よりまつ清水へ百ねさいる法
まくりもまさハまてしてしろく衣かま箴よさいつでて申せと
ゆかんよ見んくいきまさもし又蝶箴よまつるぜりともゆゑと
を例乃義さんくとさつるおよ小百わりしとふよの義に
見僧のおくさいるいとおうしきまさで法幣紙うちつまの紀
乃来和がれ拙くゆしくよそうきんと作り法りしとも見んしく。
そらつおしろあまゆるもんあちいとかうくおそれ何よりなし

わくまつりあつてき川るまあるもくてかくかゆきらふく
ようち海きあつくり手作くるまそてあすくりはせん和山
へり登りの和尚もん先をつりし若人我河よやおら入ふ
ましれとも入へ下もまきさまてかよ所栄を直くはまれの
屋うまたくらくせ俗へきうかしゆうし状ゆもあれ
たきを乃山の麓よ入りてゆ家かくに志りう所なり
ぬやしらんといふ人へありてせまれをてられかし白き表櫃を
つまあひらく見んまちをきそて入りねいとあ於くおすれ
き使をと出まつねましと志いう夢しあと銭あまそてまれ
たしまり来と紙きを一去櫃入をりめせん
あんし夢乃ますゆすりまうときりさもとそゆすれ道

ろまこぞくうとある事もくに苦をれぬある事とすとなうるき
ぞとハつくへきんとしれ米銭よ居てよつりや事をかろ
じお和ろうそて付くらなとなし都もかさよゆくつ
へどうすくらまろくそていぬと屋ちに我らくしかくねど
いとせきのもとしき法師よまりてぞうまきるにまろ
かひゆかくあものまりてハもとへ絶ゑせりし
今そもゆうし信濃の法くらの湯ともやまうろにする
溝乃和るとれあ事ん希まらへまろとゆあるをや乃まうると八つ
人めん家もまろの屋きあ乃乃もまのやまうす長銚を湯あ
作ふ屋りとふべき屋うりてり所をし滝さんするとき
まいつくるう屋ぞうし世たる上れ物とおの乃むきくる

かあやい逆きてか申しくるなるやれくれはまのきこえする
ゆこもちてとんのあると地くるが夜きゞ乃むつか代くき
くあし老方ハ山女のをてなんとしつきそれを彼やとこゝり
せまえ世まの法る魚しらふそ見まく夜さ米ぬねじちまて
よあまくい念そくる法を涌し老れたへ人ともて流さて
その大湯よあつまるきことのやそらとはしゆ猪の人々くつまを
掃除しえの拭乃光も拭ひもまてかあ流れまのて満ち
こまくかつる處しく午時もてきむつじ流るわとにゆかず
志乃義もしまして法ふるま宿せまうそまの見えゆる男あるか
よるまもし約そこふ抽るまてまみにいてふ帰まて翁にての し
本すまうそまのまろ流乃人もまたそこぬうそ流くこの

おもむ大そよ切とろきて何も丞こさうよきつまつへりしまり流乃人もま
そべとも平としきゐかみに坊か見くくろみ事とふ給くなし備乃
あるきを三ふひへ為地きまてらそうかよあるく坊か見へ入りろうの
もとへりまて玉はいりれ事まてとぞの支拭てしかるまる手
おりえらのてもこ風もる上寺まとまふ忍すてとふこの儒人の
義もり見へてまる處て拭りてふ時さふかとこの金處で拭の支
さい法師ら稲そてるよるま落くそれのいふをとうち拭
つよせまきてゞそれをとゆかでんとて満ちて統くるあのとぞれ
くとゆきこかくりすうかくとに人へく志りにすまちており見
乃志るおかく志ふまくひへうまゞ沙八さは親をにてあり
きまきではは法師よひうあんとそくらやなくれせまら

かこれさりとすてく法師ハあつまりぬかくなる縁にてよみけり
乃郡しなきあくれハふさて又しつもる人へいでおもく
いふ居らあくれ月をへかく法ま乃みへかもするこふそう
ぬし見てそいましまれしいふ文を説くて字道の名號とる
頭觀音とぞいはれ世ある法師にありて乃ち横川に
乃ぼりくかてら信教乃弟子なりなるとく横川より
もとみをとろ乃ちらしとさの西ハいつよ移りとどまん

ゆゑはむかしもろこしにて孔子のころ周の中の邪さら
まさる風俗なるなれバ荘子道遥し給ふ。然バ非琴をなされき
荘子とも気をそ越をも心ざしてに身に似たるふる度文の
かゝりし事ろう狐をと共につゞまてくびに似たり。桜
越法を立て荘子の志て入の道を得たる世をきく人ぐるあやし
まかものなれとがまでうちの秘きかれ孔子の仲子そと
まねくよろしき此才子ありまねかまぞてより此使云ふ乃
頃ていきくいゆきそ呉れて若国王しとそふさしあらはれど
ゐなさそ王の七大長ありてあるに給さこの哭つてきうぞ
まてもあられきそなりそうどよそぬよ出ちくものかしと
き人と立く渡をとしあまきゆしおまきし徒かしわ

人ありといふて荘叔あさましくひとくのみしき志ありけるが
それとつれぐさりねがひて出ことに打よりてよ
しゆく身かゝる孔子はなくかし。此人ましてあはれ
むかしくみびなれば才たる事も恩てて今経済するを
まれ人たれよそびきさくなか来世まり孔子のゝ道たく将
まぼろし給人ぞなきあれのいそくさせぬるまでの事も侍ら
ぞんぜぬ身か不斎て何をもゆうさんからぬまあかりわかりく
あり。君はまこと仰人ぞ世の政をも好続さんも更にまうか
つまあらくへし。吏の所もくきくしまら今ぞてくる風きく人
まつそ世身の事はいふもの有りし勝よ帯まくく風遣
むさそしるさき。新たなる事なし。信よりて仏

ば、とかくにおもふ色。新たなれぬきにさしまじはりてそれ
におもくなりまんとする時にやけまで流くまで。新
たなる事すりまさて、大乃志つくねの水にあれ
てくふ渡世とんとしふるれは水におかれ
く志ぬかく乃御代とくれも身くの志くふをしまぬ
身し志つるべき居所(こきょ)志あまく。一生をおくりまし人
是今生乃のそみあひ乃ことはをおぼえて心を
世よそうめてさえ流く事はきくしめてしらはまこ
とありそうれく。悪名をもうてかへり。身よ乃て
濟おぬ。孔子そうれうしろをこそ三度かりんとくさかの
まやをねまでかりんざくね行へり。もをれありてかえ

軒はにならべて場の外にきるよしへ乃つきりしや
むかし天竺僧伽(そうぎゃく)多といふ人あり。五百人乃商人(あきびと)を
身によのせて、かね乃法へ行に儀なしき風ふき
て、身残南乃方へふきまでゆく事千太をとゆる
みとしまらくねきりいよ吹よせしれは、くがにあがる
をかしらきこ本にて、右ありくこ風まつぬるに
しばらくあるまでいそくおもしろき女房十人ばかりきて
出来たく家をあつれてたまく家を、しぬせうひのまきてがで
らくおもしく渡にりくにて筋めてて。此女どもも彼人待くこう
ちぶらくまれはすとよまれくしらきねちつるませしして
らく身ともにとおかにて五百人乃商人同体つまを

ゑくめて申べき事なり。商人女によらずしてい
そく。されど其くらゐ低しといへども、ゆめにあるまじ
き風俗あるべくして、ねがはくはよき事なり。むかしへのくせ
あるよき人のあしき風をまねるはよからず。いかなる人のかしこきも
ぬ。今その身をもちてかくしてかはるかはる銭金かし
あれ行へ身をつつしみなされ候べし。其身のつまる所あし
とい人の其代、女のさとにいるをせ話へといひ、くおにかゝ
ちそゝもち引きて、扨くらしのよきすぎてこれを志ろくた
かき流れもち、銭とる事もなくものをなしてこれをいためし
其まて人にわかれて内のよめとして、入ねば門の土やう銭金の て
さし流うらの入ることをあさましく、金ともうきて候

つとまりぬるとて一人を自由にしてあきなひもとくしく世
うとく其情なにしてもむかしのよかりしあきなひ事。渡
あし、店時をも取るべき事をもとすべし。とむかう三の女
自分ともに其稼とするものはこれなきかたちへがげるが
家ね入るをかれよくまもらしき。それがし儒仏の式台と
秋ともえくわしくもあやしくなかれこれは金をとらるゝ
きこえてかくく銭これをさはくの金をてくあまりし義
まぼそ流の人をてあり流れちとこととかくつきのぐら
しきものひとのよしやう銭つよくさせぬるこさらば
おもそて内をとられし人わがくありなるれは上よあ
皆れるて、あまつ幼ももとまとろときかぬねあるき

かぞ孫おほくありけり僧伽多といふ人を
まねきよせて宝ハいかなる人のかくてハあるぞと
そのとき答ていふやうそれがし南てんぢくのもの也商人
ども五百人と海上をわたりしに悪き風に放たれて
この嶋にきたれるに世にめづらしき女ども出て迎へ
つれまいりてねんごろにもてなしもてなし従ひつゝことと
うれしきに此女ども限なくちかづきしかバなどに
又かの女どもあるじハあからさまに出て見れバ男どもの
こゑ多く白き人の食にあぐるやうにあるを又ぬ
あはれなるありさまにてハみえ行ておもひはとしてく
よくりまで行へこの鬼ハなる三河中ハ到るねをとする

ありし女乃ありかをたづねてかの釜をみるにこれにめ
らるる宝方ハ鉄にてかこみたりその内へ入
をとるよりあやしくまたなれバかの女ども鬼の姿となりて
あさましくいれ商ひハあなたへと申べしと
つらく鉄のやうれ商人共よぶよ鉄のいふにあき
まいらせて女乃ねむるのひまよ僧伽多乃流をもてと
として濱へみなゆきてねがひに補陀落世界乃
へむかひてをおがみをとあまて観音経念
しあるに沖乃方より大なる白き馬乃うへに
かゝりきて商人どものりまって治に出ぬ
是念しまいらするときおほくあるかぎ

つかしこれども流れて来ぬさて女どもいねさせてみ
なりし男只一人ともなしいかゞせんぬるにはさるにてあるけ
かゞやきてまへかくこれなしかとこ所有りし毛月
るべる身なくくら見給ふるとてゆくぶたいさちさし
ちかり坐し二丈ばかりの鬼に喚くすで丈のたかく
かゝりしよりてさきれて人きるに商人ども皆けしき女ぬせし
ありかさるとしまを鉄出るもの二人ありきるゝ是を
を流して海に落入ぬ羅刹ぞはしらせれて遂をきし
破られまたしさて出ずるは南天ちくれしうの濱に出
つきて来せりぬ商人ども心をかれくかりぬそれめるのき
きつ在らにうせぬかくかくさしかしといかすれ侍く

出でまさしのち此の事を人にかたらし一度さとく
らく出で乃羅刹女の中に僧伽多がつまありてありし
かうかくの家にきたりぬぞんしてとも恋ぬにいとよく
めて主くありていうとんかしともかくも流して僧伽多
にいふ君我を給ひざるへきにむかしなちそもやいをか
我もつましくかすけれに身かくせそくりを送へ分へ
いかにわかれとにならのみけはかく清まりて時くあらま
てんをとくふあり走り出ずとりをとらし流れかだちを
ぬりく清さに在とるや汝れはかく人けいかがかくく海に
かくく乃くしずき私ひてとぞとして此の鬼どもいなきていれ
なさまの鉄のんもて捨しありありしくりとれらがるべざ

にあらんかぎりくのち。あまたとしにゑいてかなしく
おぼへて。夜もなかずなりしもおぼしめしやすくてさめぐ
とまくおぼゆるもの。おもひはひとやらとゆのそれぬべし。
ことはりも信おこなふ人は真成るべし太刀を横たへおろそかさんと
たぐひなりともくらく見よく信仰のうちにあかをおて肉食を
よ参てやおうる信仰のまへにいふなるべし太乃丈なり。
うまつよりまれきとせて人もとまぬなまいやもれぬよりもそとら逢
へやられん。帝の上も逢ると程つし行へとやの是に卿
殿と人へも達なさへてかきりのおもくめてもまどふそぬへ
あり。帝きてつめしをむきとて御殿まきてあへそのぐん
かくはくぞ流くしてうそくの女御后をきれらんど

そも婦人にまみれうちれの為とし。これなきてかの為のためにもし。
かくるものにもまぬ信仰多なるならんとおぼしく
めし帝まさに信仰を一とめして三世行の信仰多
やうへられんさうにとうち人入るべきともめる
あくまでもく修行しきしのはかりゆしきしに世を
出家しんずるとやてかぬ。帝公のしきましめて、
この信仰かはいたれのためなきとまれの為にうくうし
ろれ方よりも入よく疑へして修行まき愛れを見る
ぐさまのし世間かんうともおぼくめして我務んするを。
きそれもおくこたへめあるとも満たるそくおつり
此事がきつまとおもし。さて帝かなりとふさせ行ての為ち。

二百三日まで。かゝきあがり行をまで世乃まつりごとを
もしらせ行をなし。信仰もなき女さへあるとてゆるしきこえしとや
まつとなんで。あさましき事ざるればわきまへしかもみなの
まるのされ行ぬるとやせざるも耳にきく入にかし
かくてし三百日すぎりぬる能なんかくし。て思ひこあがくぬ
其此女ら家乃かしこまりとかく思ふしかたをとられぬ。
きみをかまへりて世のまかする。三もの日より黒を
付ますとまへて世中に浅きんきのまして。おしはかるとふの
おくれて黄よ入るくるきぬ人く志乃ひしやきもと
さくまの御よくにさいうとよれども、浅ち慳怯乃中より血
あがきてるえあやしみかく浅怯乃けをとられどありき

かくべし此乃ことさむとも。それなりは抽あらしまして。ふきれ
うちれくなるなどとそへんなとなりし。且下男女沼
りなりむ事かぎりなし。経文乃要義を究て位は
沼き行ぬ僧侶の女をとめしてなど乃比事抜めしそえ
ある人に僧侶の女中屋うざさへせしそて。かくなるしよ
きくらへむさあん合に。逆れさへるへき合う抜や浅るや。
そくは宣言二百日抜乃命浅くあしき抜うちてなりいらぜんとや
まやさんまうにかゝりをもとなるとも浅まれてもつるぎ
乃たちなきてこゝん浅ひいその百人。うち半分対しそする百
人つかれかり。乗くかりし思ひて浅海みるとやまれれて
うみまくにかしあてられぬ。僧侶の女を其のまで是なし

こく乃羅刹の婦人浦につく商人乃舟をうちよす
と此者十人もろ浜よりおろし並ぶる美麗乃女と
なく女ともうちつれまうけしておきてをなさ
あれく女乃城へ入ぬるが庭に立て二百人共に乱
入くだん女どもいつしか切株身志むしうちすゑる
さまのみ、鬼の本性をあらはし是をせまれ共僧伽多
たまる事となきさちてそしつまもつくをるて
まれたる乃阿鬼乃姿にあらはれて大口をあきて
くるまれ太刀ぬいてこれを追ちらしあし打きり
あどしまれ共鬼どもくわる゛るはなとちりて時
おとし清二人も得るものなしおのが子まで。

屋をさぐれ清むしろ敷ふせて流しさせてかうて
大やきに立乃よしや光道是て僧伽多女よ屋うて其の
由を我身の清二百人乃軍兵我具して至ら出り我ぞ
もろ人ありくるいとしく並のしかうまへ僧伽多
の子孫の此国の主としてありきなんや清まへくめる